法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-09

木下夕爾の文学とその背景(2)

岡田，秀子

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要．人文科学編 / 法政大学教養部紀要．人文科学編
(巻 / Volume)
66
(開始ページ / Start Page)
153
(終了ページ / End Page)
192
(発行年 / Year)
1988-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005349

Hosei University Repository

木下夕爾の文学とその背景（二）

岡田秀子

一、ああなんという長い不在

「一篇の詩が読む者にまきおこす、一種の絶対的な驚愕は、なによりも、その情念的空間の完結性にある。」(1)

詩的体験を語るなかで傑出した戦後詩のいくつかに触れて、詩人栗田勇はこのように言う。同じ戦後詩ではあるが夕爾の「長い不在」から私がうけるそれは、少し違う。この詩を読む時、読者は驚きよりは一種言いがたい深い思いに心うたれるのではないか。その依っているところは、この詩が完結した情念的空間を出現させるようなものではなく、むしろ非情念的とも云える、明るく明晰な思念の空間に読む者をひき入れるからだろう。前稿でも触れたがあらためて再読してみよう。

長い不在

かつては熱い心の人々が住んでいた

Hosei University Repository

風は窓ガラスを光らせて吹いていた
窓わくはいつでも平和な景をとらえることができた
雲は輪舞のように手をつないで青空を流れていた

ああなんという長い不在
長い長い人間不在
一九六五年夏

私はねじれた記憶の階段を降りてゆく
うしなわれたものを求めて
心の鍵束を打ち鳴らし

（昭和四十年「中国新聞」）

この詩には原爆ドームを示す単語は一言もない。しかし背後にドームが幻のように浮ぶ。前に立つ詩人はこの不思議な絵の点景だ。たくさんのものが描きこまれそして消されたこの濃密な空間は、にもかかわらず絵にたとえれば透明感のある淡彩である。実際の原爆ドームは年月を経ることでかなり風化している。それは惨劇の残骸を見慣れた私たちの目のせいでもあるし、凝視することを拒否して生きたからでもある。夕爾の詩に幻のごとく浮ぶドームは、これらと違って、薄明の空間にその時、時間が止ってしまったようにリアルに出現している。まるで誰も語らなかった原爆の深い心的事実を暗示しているように。この詩は夕爾の一瞬のうちに浮び消えた心の風景なのであるが、われわれにまごうことなきリアリティをもってモスクのようなドームをイメージさせるのである。どんなすさまじい出来事もやがては風化する。風化しかけた傷の上に夕爾は自らの過去、現在、未来を重ね、一瞬にして語る映像のようにすべてをうたっている。かつてはあった今はない、私は行く、粗雑に読めばそれだけのことである

Hosei University Repository

が、実はそんなものではない。〈かつては熱い心の人々が住んでいた〉にはじまる四行は夕爾が自ら想い描くことでそこに魂を住まわしていた調和の空間であり、かつて自らが書いた詩の中で生きもした時間である。たとえば、この四行は次の詩に似ていないだろうか。

ソワレエ2

ゆふぐれが来て美しい網をひろげる
そして捕へる　まだあそんでゐる子供たちを
エエテルのやうに　空気は軽くいい匂ひがする
僕は木かげの石に腰かける
それはさつきまで夏が抱いてあたためてゐた　白い卵のやうだ
あたりにすずしい時間が立止る
僕はおとなしい家畜の眼をする
樹脂が流れる方へ向つて　僕の耳はひらかれる
遠い沼がマグネシウムのやうに光つてゐる……

（『田舎の食卓』）昭和15年

夕爾には自然の美しい風物をうたった詩が多い。生活の中で純化された目（素直な心に写す目）が余分なものを捨てて現実だけを見た成果だが、それを周囲の者は美しすぎて現実ではないと評した。四季折々の季節感が美しくうたわれ、そこには「都会のデッサン」のかたちで抽象された青春の情念がいきいきとうたわれていた。夕爾はそのままみそさざいであり、てんとう虫であり、死の一年前にはその爪をせい一ぱい振りかざしてゆっくりと歩いている蟹であった。「分身散体願望が具象化するのは、個我を牢獄として切実に体感するような感受性」（見田宗介）[2]と言われる。晩年の夕爾が個我を牢獄として体感していなかったとは言えないが、夕爾のそれはまるで自然に小動

Hosei University Repository

物と一体化しているようだ。〈雲は輪舞のように手をつないで青空を流れていた〉というメルヘン風な表現も二冊の詩集『田舎の食卓』『生れた家』の中にあるどの一行にも通じている。

季節の合間、その一日の昼と夜のいずれにも属さないあいまいな時間の消息というのは、この時期の木下さんが好んでとりあげたモチーフで、そこには木下さんの繊細な感性によってとらえられたもっとも純粋な世界がある。〈エエテルのやうに空気は軽く〉〈すずしい時間が立止る〉世界だ。そこでは木下さんの存在が、無限に透明な世界を見、永遠の静寂を聴こうとするためにだけある耳目となっている。これは近代の抒情詩が到達したもっとも優美な地点のひとつにちがいないが、詩人としてはそういうところにいくらもとどまっていられるものではないのである。（久井茂『追悼記念誌』）

もちろん夕爾がいちばんそのことを知っていた。二冊の詩集を上梓したあと『木靴』を発行していた夕爾は『木靴』の詩風をてれながらも〈知性の祭典による抒情詩をめざす〉と言っていることからもその意気ごみがわかる。現実を見ること、生きた他者と対話すること、つまり理性の限界に挑もうとする情熱は、自ずと生来の憂鬱な質との対峙をもたらす。夕爾の句に〈生涯に一つの秘密レモンの黄〉というのがあるが、これは夕爾があの名作『檸檬』の作者、梶井基次郎に素質の上で似ていることを意識したためと想像できる。『檸檬』は小説の形をとっているが、散文で書かれた詩でもあって、その文体の透明な清潔さは、見えないものを感じとり精神をこらして凝視することで到達し得たものである。〝暗鬱さを描いて暗く不安なまま透明感のある〟世界は夕爾がとらえようとする世界でもあった。夕爾の句に、〈木をかわる蟬の心に触れにけり〉というのがある。それが梶井の場合は、外の対象ではなく、自分の中に棲みつくあるものにふれているのだ。夕爾は自分のいだく現実感と梶井のそれが類似していることに驚愕し〈生涯にたった一つの秘密〉として心にしまったのだろう。ひと一倍羞恥心が強かった夕爾だけにこの想像はあたっている。夕爾に次の詩がある。〈ひばりのす／みつけた／まだたれも知らない／あそこだ／水

Hosei University Repository

車小屋のわき／しんりょうしょの赤い屋根のみえる／あのむぎばたけだ／小さいたまごが／五つならんでる／まだたれにもいわない〉

高橋英夫は青年期に愛読した梶井基次郎を三十年以上たって読みかえした感想で、[3] 昔よりも心に沁み入り、よく分る気がすると言っている。〈おそらくそれは、梶井が青春を描いたのではなく、青春期にある作中人物を通じて、人間存在の永遠の状態を暗示したからではなかろうか。……私には、梶井の作品が人間の根本的に剝き出しの状態を捉えているように思われた〉と。そして、「視ること、それはもうなにかなのだ。自分の魂の一部分あるいは全部がそこに集り移ることなのだ」(『ある心の風景』) という主人公のモノローグをひいて高橋は梶井が青春とか病気とかに捉われた人間であったことによって日ざしとか雲とか木立などのものの世界を発見し、心とか感情とか感覚となって揺れ動いている自己を発見したと言っている。このことは夕爾にもそのままあてはまる。〈けっして沼から出てゆけぬ朝焼け夕焼けのような夕爾の閉じられた自己〉はそこから風となってかまど火をあおり、焰の舌となってものを見、触れる目を育てた。夕爾もまた、黄昏やあかるい日向の抒情詩人の質を残したまま、人間の存在の深みに降りたって言葉を汲みあげて来る詩人へと移行していった。生来の純心な質と繊細さは、日常生活ではヒロポンを打ち、睡眠剤を常用しなければならないほどであったが、そうした位置から見ることによって「長い不在」の不思議な世界を現出させている。この詩は、前四行、中四行、後三行が過去、現在、未来とわけられるが、その長い時間の経過が一瞬の時間に投影して時間的立体構造となって現出している。奇異な連想かもしれないが「長い不在」の詩は、後期セザンヌの風景画を想起させる。

前衛的で困難な試みではあるが、抽象的な思考をそのまま生の発条と化して詩や小説にしていく人はほかにもある。小説では埴谷雄高、詩では宮沢賢治などがそうである。しかし、それを夕爾のような優美な言葉で表現し得たであろうか。夕爾はこれしも自らの天才ではなく、温暖で美しい風景のことばに語らしめられたと思う詩人である。

「私には宮沢賢治のような詩は書けない、あれはあの風土のものだ」とどこかに書いていた。夕爾にとって故郷の風土は、〈われらの瀬戸内海地方独特の／優雅と明哲と篤実と温和と／人の心のラテン的均整美……〉(「備後都

Hosei University Repository

市・詩と夢と」）といった風土としてとらえられている。

癌細胞は三年で小指の先ほどの大きさに育つそうだ。この大きさで切除すれば助かる場合もある。ところがそれを過ぎれば、細胞は倍にその倍にと増殖するときく。五月に入院、八月死去は、癌の発見治療の手遅れではあるまいかと事情を知らない私は思ってみる。しかも夕爾は不気味なこの病魔の影を予感していたのではないかとも。というのも死の三年前頃からさまざまなかたちで心の風景を夕爾は描いているからだ。「人生」「道」「海沿いの町」その他も意識して読めばこの時期のどの作品にも末期の眼が重なっている。なかでも「人生」「道」はこの「長い不在」へとつながり、この作品を補足し支えるために書かれたとさえ思えるのである。ただこれらと「長い不在」とで差異がみられる個所は、前者には夕爾という一人の詩人しかいないことである。これらの作品の死と孤独と幻想を描く手法はあくまで個人のそれであり、かならずしも無数の非情な死へとつながるものではなかった。ところがこれに対し、「長い不在」の風景に住む人は、熱い心の人々と複数になっている。熱い心の人は夕爾ばかりではなく峠三吉であり原民喜であろうか。〈かつては……〉にはじまるこの四行を読む時、私はふと原民喜の『壊滅の序曲』の結びの文章を想いおこす。「暑い陽炎が百日紅の上の静かな空に漲っていた。……原子爆弾がこの街を訪れるまでには、まだ四十時間あった。」にはじまる短編である。

この短編は、おそらく広島の原民喜の実家を舞台にしたらしい家人たちの争いを描いたものだが、そうした人々のみにくい争いよりは、まもなく襲いかかって来る尖光になにも気づかない不気味さを読む者に感じさせる。われわれはこのように、四十時間先にせまる惨劇も知らず、愛し争うおろかな生きものである。ただなし得ることと言えば、それをしっかりと冷悧に見つめることしかない。熱い人とは夕爾にとってこういう人間のことである。人間とは熱く、ひたむきにおのれの現実を生きる生きものの一種にすぎない。無心にひたぶるに生き凝視するものの謂である。それによってのみ、いじらしく、尊い。〈ああなんという長い不在〉につづく〈長い長い人間不在〉の人間とはこうした背景において読まれるべき詩語である。

前にふれた夕爾の詩「人生」（昭和三十七年）は次のようにうたわれている。

Hosei University Repository

人生

樹木や草花はひかりの中に揺れさざめき
空の雲は立ちどまってその影を
かがやく噴水やまるい芝生の上に置いていた

覗をふかく垂れこめた乳母車の幼児のように
私はねむりながらそこを通りすぎた

ああわが父母わが妻わが子わが友がき
すべての愛と平和にみちたものたち

私は今一番おそくともる星のように
閉ざされて行く世界にむかって眼をひらく
まだ終りきらない小鳥のさえずりを抱いて
暮れなやむ一本の樹木のようにかげふかく
私は私の言葉を語る

（『木靴』昭和37年）

この詩は「長い不在」と同じ構成で書かれている。前の五行が自然に抱かれて夢のように生きた幼少年期の風景である。ここには夕爾が愛しうたった樹木や空の雲、噴水がある。（初期のそれは都会のシンボルであり、死の七年前に出された詩集では〈噴水は／水の涸れている時が最も美しい／つめたい空間に／僕はえがくことができる／

Hosei University Repository

今は無いものを〉としてあらわれる）〈ねむりながら通りすぎた〉とは夕爾の日常語の表現をかりて、〈うすぼんやりと過した〉とでも読めばいいだろう。終りの五行が自らの命の消えゆく姿と入れかわりに自分の言葉で語りはじめる姿が遠望される。この詩でも最初の五行は過去であり、終りの五行は移行しつつある未来である。その間にある二行は現在で、〈ああわが父母わが妻わが子……〉は素直に読めば愛するものたちへの惜別の感情の表白であろう。しかし、愛はそれを深く受けたと感じれば感じただけ、わがままに過ごした自分を意識する。夕爾の句には罪障を詠んだものが多い。

曼珠沙華わが満身に罪の傷
青空の青ふかく薔薇傷みけり
罪障のかくふかき汗拭きにけり
生きもののなげきを虫も鳴きつげる
冬夕焼わが失ひし血のごとし

（『木下夕爾全句集』）

若くして実父と養父を失い、病気の弟に思いをはせ、不本意な帰郷をかみ殺して生きつづける彼の奥深くにある罪意識は、後に記す「道」という詩の中で〈どこからともなく／私はきた／どこへともなく／私はあるいてきた／私自身にさえそむいてきた〉の詩語ともなっている。〈冬ひばり昂るおもひなしとせず〉と詠まないではおれぬ日もあっただろう。愛するものに心通わず、身内の人々の関係の網の目の中心で妻や子の救いを乞う手をつめたく無視したことも度々であったろう。〈黙っていてよかった／それでよかった／夜もしらむ／嵐の庭に／ゆれやまぬ藤の花房よ〉私が長年夕爾の詩として記憶していた詩である。私はこの詩を心で口ずさむことで何度激する心を押えることができたかしれない。夕爾の詩としては生の声の出すぎた習作（そのため定本『木下夕爾詩集』には収録されていない）を記憶していたのは、近くに住んで夕爾を直接、間接に観ていた私がいつも悠々として何げなくあっ

Hosei University Repository

た詩人のうちに激する心をおさえた夕爾をのぞき見ていたからとも思える。

家庭とは、自我を強く持つ人間にとって、まして詩人にとって、桎梏の場でもある。

「私たちは人や土地や時の縁でむすばれて、日々を暮らしている。詩もまたそれらと離れては存在しないところがあって、それは詩をしばるどころかかえって自由にする。正直になりたい。裸になりたいと思いながら書いていても、詩をしばるものは結局は自分でしかない」（谷川俊太郎『日々の地図』あとがき）

結局は自分でしかない　ことに行きつく悩みを悩みながら、愛する人たちに傷つけられ支えられた生活。先輩の詩人の死に際し、自らをふりかえって詠んだ夕爾の句に〈枝豆や詩酒生涯は我になし〉とある。前掲「人生」の〈ああわが父母わが妻わが子…〉はこうして原民喜の『壊滅の序曲』ともひびきあい、そこに自らの現実を自らのことばで語った孤独な詩人の生存と生活が浮き上る。夕爾の生涯の最後の詩「長い不在」の「不在」という詩語は、「非存在」ではない。かつてあったものがなくなったというものではない。それは、かつて存在したという時間と存在しなくなった現在という二つの異った時間が一つの言葉になっている。これはまさに現在に対する過去の投影を見ることができる一語である。夕爾の詩には「影」が実像よりも色濃く、読むものが「影」を実像と見てしまうしかけがあるが、私はこれを勝手に存在論的視点と名づけ、その視点からは「影」こそ実体なのだと思っている。〈ああなんという長い不在／長い長い人間不在〉の〈ああ〉という感嘆詩とつないで、これだけ短い言葉であますことなくあらわしきることはけっして容易ではない。そして「長い不在」は、終止符とも思える言葉、〈一九六五年夏〉の一行が置かれる。この詩を書く夕爾は、こちらの岸にいて、鍵束を打ち鳴らしねじれた階段を降りてゆく自分の姿をはるか遠くに視ているのである。「ねじれた階段」（終りなき運動の象徴、螺旋階段と原爆により破壊された階段の二つが重ねられ、降りたところにピラネージ的空間の存在を想起させる）も「心の鍵束」（存在するすべてのモノに心がありことばがあって、その心をひらく鍵は束になるほどある）も濃縮された詩語だ。しかもそ

Hosei University Repository

れは日常語に近いさりげなさである。それらはすべて、夕爾の認識する「自然」の相であり、「宇宙」の相である。

木下さんの詩が、特に今の詩檀の若い一部の人々よりも安心して読めるという訳は、私には必ずしも云い易い事ではない。つまり誰でも母乳が他の飲み物にくらべてどの点ですぐれているかときかれたらどう答える？

母の乳は母の乳で「飲み物」なんかぢゃない、と私たちは云いたいだろう。あまりにも身に適し、身に快いものは他と比較する事さえむつかしい。丁度そうした感じである。が、本当を云うと彼の詩は全部信じられ全部身になるのであり、母乳と同じである。そのわけは彼の書いている事はすこしも誇張でなくいびつでもなくそして嘘がない、という事である。今新しい詩を考えるとそこに阿鼻叫喚があり絶望があり、身ぶりがあり又悪魔あり天使あり、であるけれどリアリティがない。木下さんの詩にはそのないものがあり、嘘と誇張がない。

それは生活の中にいきづく昆虫の心であり、雨と沼の心であり、みそさざいの心であるが、それはすべて木下さんの内面にすっかり根を下ろしているものの事である。或は木下さん自身の事である。だから何を書かれても、「それは嘘です」と云うことはすこしもない。彼の内面のグラウンドにきちんと根をおろして居り、宙にふわついているのではない。そして逆に今の世の中の詩に「それは嘘です」と呼びたい詩はどれだけ多いか。むしろその嘘をかく事が詩であると思ってみな競い書いている仕末である。

だから彼の詩が微温的だとか、現代の激しい闘争的な世界を知らないとして評価をおとす人があっても、私はその人は何も見得ない人だと思う。勿論彼の詩には社会性があまりない。しかしコミュニストのポンジュの詩が社会をうたっていないから価値がない、と云えるだろうか。人が詩を書けるのは自分への誠実さが第一であり、またすべて物の心へ入りうる心なくていかなるよい詩もまずあり得ない。ポンジュの書いている詩集の題は「物の味方」であった。そのようにして鍵をもたない人が味方でない人がいくらノックしても扉は開かないのだ。

（永瀬清子「すべてはその詩に似ていた」『追悼記念誌』）

Hosei University Repository

どうも詩人は〈書く以前に召されたるものとして、あちら側の世界を垣間みた異常体験者として詩人となる〉という比喩通り、詩人の絶対的現実感はおいそれとは伝りにくい。夕爾が近江卓爾氏をともなって遠路岡山まで永瀬氏を訪ねた理由も想像できる。詩は、それぞれの読者の現実感にひきよせられて、感じ読まれてしまうのである。

木下夕爾小伝を書いた清水凡平氏は「長い不在」を夕爾の他の原爆詩と一つにくくって、抒情詩人、夕爾には書ききれない主題と評している。氏には昭和二十四年、夕爾が同人詩『木靴』を創刊、主宰者となって活動しはじめた時、兄上の卓司氏が助言された「お前はいつも過去へと顔をむけすぎる、きれいごとではなく、もっと現実に立脚した生活の動きのある詩を書いたらどうか」（清水氏の取材）とぴったり重なる夕爾批判があったのではないかと思いたくなる。

「兄の卓司の助言が夕爾にどう響いたかは判らないが、昭和三十一年、朝日新聞にルポルタージュ詩「広島・同じ空の下に」という原爆をテーマにした作品を発表して以来、夕爾の詩的視野はしだいに社会的なものへの広がりを見せはじめてきた。

だが、あまり錯綜し複雑化した社会の、さまざまな矛盾や歪みの根本的なものへ迫り得る、思想的、社会科学的認識力がどれほど夕爾にあったかは疑問であった。

「火の記憶」「広島平和公園にて」「長い不在」など一連の原爆詩を書きながらも、その作品の底に潜むものは原爆による人類の悲壮な終末感よりも、むしろ、自らの抒情への終末としてうけとめられもするのである。

（「木下夕爾小伝・笛を吹く人」『追悼記念誌』）

清水凡平氏がこの小伝を書いたのは昭和五十年であって、社会科学的認識力が詩人にも必要と思われた時代であった。「運動」と名づけられた行動が信じられ、そこから抵抗精神を感じさせる詩を称揚する傾向もみられた。

夕爾にも求められるままに書かれた工業都市をたたえる詩や社歌があり、詩を商品とせざるを得なかったことを

Hosei University Repository

しのばせる詩もある。原爆詩においても、観念が目につき、うわすべりの感傷や祈りに終っているものもたしかにある。ところが「長い不在」はそれらと一線を隔しているのである。

夕爾はつねづね「詩は自分を救済するために書く」と語りもし、記してもいる。しかし、「詩人とは、自分を救うために言葉を用いるものではなく、言語のうちにおいてしか世界もろとも自己を救い上げられない人間」（栗田勇）だということも事実である。〈自己救済のために書く〉という夕爾の言葉は、夕爾が、存在の深みに達しようとする人間であったことによって言語を必要としたからであり、言葉の欠落はまさに存在の危機ないしは存在からの脱落として感じられたからであろう。

戦争が終って二・三年を経た頃、夕爾は、「待ちに待ったあげくあらわれ出たのがマチネポエティックとは驚き入りました」。と友人に書き送っている。生きるために夕爾は新鮮で生命感にみちた言葉を希求していた。夕爾の希求していたのは平和になり、詩語を磨けることではなく、なにはともあれ言語の倫理的威力回復であったと想像する。一九六七年、夕爾没後二年を経た一月号の『現代詩手帖』に栗田勇は「詩の復権」を書いている。

今日の詩的営為というものは、かつて、文学や詩が自明のこととしてあった時代のように、素朴にいかに生きるかということでもなく、また、詩の模索が方法的懐疑にとどまっていた時代のように、何を、いかに書くかという問いにもないことが明らかとなるのである。

もはや、現代世界が正統性と自明性を見失っている以上、自明なものは文学にも詩にもありはしない。ここでは、書くというその行為自体の根拠それ自身が問われているのである。フランスの詩論家、モーリス・ブランショや、ミシェル・フーコーが、もっぱら問いかけているのもその点であって、私たちは、日本の今日の詩のあり方を眺める時も、彼らフランスの詩人たちの影響としてではなく、世界のむしろ、同時代人として、同じ時点で、必然的に同じ問題意識に今日の詩が逢着していることを知るのである。

だが問題は、「書くとはどういうことか」ということにとどまらない。

Hosei University Repository

言語行為とは何であるか、およそ行為と言語との関係はどうなのか、言語の原初的地点における世界との関連はどうなのか、という極めて広範で、かつ、人間の存在の根底にかかわる問題に遭遇していることを覚らないわけにはゆかない」（わが詩的体験への接近」『栗田勇著作集十』）

栗田はこれにつづいて、もはや詩における問題が、詩や小説というジャンルにとどまらないのであって、疎外された人間と世界の回復の鍵は、まさに言語を回復するほかないと言及している。「言語の解放と再生なくして人間の意識と肉体のすべてを孕む世界の再生はあり得ない」とする認識は、そのまま夕爾の「長い不在」の背後にある認識ではないだろうか。周縁文化の孤立の中で、夕爾はそこまで思索していたのである。

補記

美術史にあまり大きな地位を与えられていないピラネージはにもかかわらず英国及びフランスの多くのロマン派詩人に師表と仰がれた人物である。彼がしばしば銅版画（「空想の牢獄」「牢獄の気まぐれ」など牢獄シリーズは有名）のなかに描出した劇場的雰囲気は、詩人たちへ霊感の泉を提供した。ここにはほとんとすべてに螺旋階段が描かれている。渋澤龍彦は「胡桃の中の世界」（河出文庫）で螺旋について一章を設け、ピラネージの空間のさまざまな解説をのべたあと、「ピラネージの空間（牢獄）は、いかなる時代のいかなる現実の牢獄にも似ておらず、一個の悪夢のなかの牢獄としかいいようのないものだろう。牢獄でなくとも、こんな途方もなく広大な内部の空間をふくんだ建造物が、現実にあるとは到底思えず、しかも広大な内部の空間が完全に密閉されているらしいのである。悪夢の牢獄というよりも、これは密閉されたまま無限に膨張する、むしろ悪夢という名の牢獄であろう」と言っている。

夕爾の句に〈夜の胡桃打ち割られ食ひつくされぬ〉がある。夕爾はこのピラネージの空間についての知識をもっていたのではないかと想像される句である。そう見れば、「長い不在」の〈ねじれた記憶の階段〉が〈記憶にある

Hosei University Repository

ピラネージの螺旋階段〉とも云えなくはない。〝詩は素直にとらえたほうがいい〟と生前夕爾は書いているがにもかかわらず私は、この解釈も面白いと思う。

二、生きるための装置（生活と詩作の間で）

芸術家（創造者）が単身者として社会を生き、パトロンがその作品とひきかえに生活を保障するというシステムが衰退するにつれて、芸術家たちは志を同じくするもの同志、群あって創造生活を刺激しあう。文学に関する例をあげれば、和歌や俳句の世界がそうである。都会であれば、近代詩や小説においてもこれに準ずるグループが自然発生的にできやすいが、そこでも一人が病弱なため経済的パニックに落ち入った時、他の誰かが全面的に経済生活を援助することは不可能である。その場合、彼らはやはり故郷にある「家」に依存するしかない。「家」制度がなくなってもこの事情は変らないのではなかろうか。青年期までは父母、成人に達すれば結婚によって妻が、父母にかわって彼の保護者となるしかないだろう。「もう結婚した頃から歯ががたがたで、ちょっと無理しても熱が出て」（妻・都氏言）といった体質は夕爾にとってそれ自体、重荷な自然（他者）そのものであった。夕爾が三十歳までは独身でいることにきめていた（都氏言）のはこの虚弱な体と密接にかかわって生存する上で考えつめた決意であり選択であった。具体的には母や兄弟たちの居る家で自分の薬局を営み詩を書くことである。第三詩集『昔の歌』を上梓した後の夕爾は、昭和十九年結婚する。取材に答えて「働き手が要ったからでしょう」と都氏はほほえまれた。

たまねぎに映るかまど火娶たれば
春愁のわれに甘ゆる紅をひく

Hosei University Repository

夕爾全句集の中で妻を詠んだ句はこの二つだけであり、具体的な新妻をうたったものは詩には一つもない。昭和十八年頃からはじめた俳句は、夕爾にとっては社会的存在として昼間の世界に心を住ませる手段だったと思える。日本という文化圏に共存し協調することは一家の中心となって生きることを選びとった以上、夕爾の義務でもある。この二つの句に接する時私はいつも、ひらひらした恋愛幻想をとりのぞいた結婚のさびしい美しさに心うたれる。この句は普通に読めば厨に置かれたたまねぎに妻のもやすかまど火が映っている情景をじっと眺めて〝娶たれば〟と感動している夕爾が浮ぶ。夕爾は詩を語った文章で「俳句は幸いに十七字という宿命を負っているためもあってセンティメントをその言葉のうらに隠し了せる点でまだまだ「詩」よりは可能性がありそうに思う」（「福山雑記(2)」『わが詩わが旅』）と述べていた。ところでこの句を夕爾の詩の言葉で翻訳すると次のように読める。

たまねぎ（妻）を凝視しているかまど火（夕爾）この詩人にとって見るということは、自分の魂の全部が乗り移ることなのであってその象徴的な表現を映るという言葉にこめてあると見ることができる。夕爾の詩は、昼の世界（制度や秩序）から解放された夜の世界の自由さの中で書かれていて、死の一年前（昭和三十九年）の詩、「僕は生きられる」はかまど火を夕爾自身の内面の化象、ないしは生きる営みの象徴として表現している。いわば夕爾にとって見ることはまた触れることでもあった。

僕は生きられる

僕は生きられるだろう／僕は生きる／白菜の肌を舐めまわす／朝のかまどの火のように
僕は生きられるだろう／僕は生きる／夜ふけの皿の煮凝のように／肉と骨から完全に分離されて
僕は生きられるだろう／僕は生きる／中途でよじれちぎれながら／物をつかんでいる／枯れた蔓草のように
僕は生きられるだろう／僕は生きる／ただひとりでも僕は生きる／枯草の中で僕をつまづかせる／石のような／
自分の生を確かめて

（昭和三十九年「パアゴラ」）

Hosei University Repository

だれも居ない厨をうたった詩が夕爾には多いが、厨もまた夕爾にとって生活のもっとも単純化したシンボルのようだ。〈貧厨や白菜舐ぶるかまどの火〉〈歎けとやゆすらうめ咲く厨裏〉などの句もある。そして枯草や蓐草となって物をつかむ営為が夕爾の詩作であり、世界への愛である。〈僕は生きられる〉は夕爾が死の予感のもとで死の影の恐怖に抗して書いたとみる見方が多い。だが私はそうとは違う解釈もできると思う。

夕爾にとって〈生きられるだろうか〉と言った問いは、すでに結婚した頃からのもので生きることが書くことでしかあり得ない人間にとって、しかも書くものが商品とならない時、〈僕は生きられるだろう／僕は生きる〉は自らを鼓舞する言葉であり、激しい意志を呼びおこすため以外のものではない。こう見る時、〈たまねぎに映るかまど火娶りたれば〉の句は生涯の伴侶を得た感動が静かにしかし激烈にうたわれているのである。これに対し、〈春愁の……〉は詩想をねるともなくぼんやりと柱にでももたれている夕爾の目が鏡に向って無心に紅をひいている新妻の影をとらえて、「われに甘ゆる」と感じている。むしろ自分の甘え心の投影であり、可愛らしくて、品のいいエロチシズムがただよう。

「私は睡眠薬の常用者だが、十数年その分量のふえただけ俳句のなにかが減ったような気がする。……」（『わが詩、わが旅』）と夕爾は書いている。存在の深みに下降していく必要のない俳句というジャンルの表現方法は、夕爾に世間並みの幸福を保障し、生活と芸術表現とが対立し相殺することが少い道を用意したようだ。

ところが、この頃（昭和十九年）夕爾は突然、旅に出てしまった。

「大きなスランプにおちいったとき、それは詩活動だけでなく彼の人生に於ける生活環境もふくめて、悩みこんでいた。ある日突然鳥取の方へ行ってくると云ったまま家を出て、一週間も十日間も音信不通。しかも帰って来なかったことがある。奥さんはじめ近江さん私等も心配したが、どうする手もなかった。鳥取から名古屋、東京とむかしの地をなつかしみ、また悩みをかみしめながら歩きまわったすえ、ひょっこりとかえって来て皆を安心

Hosei University Repository

させた。その頃の第一作が「遠い眺め」(『笛を吹くひと』)であった。(細川昊「あの頃は」『追悼記念誌』)

この家出が、夕爾に十年後、「呼ぶ人」を書かしたと私は思うがこの詩については詳しいことは章を改めて書きたい。

呼ぶ人

枯野のまんなかで／犬を呼んでいる／まだかえってこない／愛する者を呼んでいる
ひどく寒い日の暮れ方だ／オーバーの襟を深く立てながら／あんなに振りしぼった声で／呼ぶんだろうか／呼ばれているんだろうか／僕は

(昭和三十四年発表誌不明)

エッセイでは家出のいきさつは夕爾らしいたんたんとした調子で回顧されている。記してみよう。

その頃は苛烈な時代であった。こまやかな人情などすっかり失われてしまっていた。かねてきく出雲の国へ行けば、その失われたものがまだのこっているかもしれない、と私はあこがれたのである。

しかし苛烈な戦争の重圧をこうむることに於いて、出雲の国も例外ではなかった。シンジ湖のほとりの宿へ泊まったが、そこで作ってくれたニギリメシは、私の持参した米と全然違っていたのみならず、塩も使ってなかった。塩のないニギリメシはわびしいものである。私は、日の御崎でそれをたべ、海猫の声をききながら、これらの詩を書いたのであった。

大社から松江のラフカディオ・ヘルン旧居へ行きたかったが、駅前の切符を買う大行列をみると、帰りの乗車券を手に入れるのが先決問題と思われた。

Hosei University Repository

つひにヘルン旧居へは行けなかった。……中略……
しかし心の家郷をもとめ得ないこと、戦後もその頃と変わらない。わが心の家郷はいずこに在りや。このときのわびしい旅の数日にもそれが在ったのだと私は今にして思うのである（昭和三十三年、一月『わが詩わが旅』）

年譜（『追悼記念誌』）によるとこの「わが心の家郷はいづこにありや」と夕爾がふらりと出て行った前後は次のようである。

昭和18年夏　井伏鱒二、山梨県の疎開先から帰郷。井伏氏の人柄に魅せられて私淑。特に釣を伝授される。
昭和19年1月　梅田都と結婚
昭和20年8月　敗戦、井伏氏を中心に東京からの疎開組、木山捷平、古川洋一、村上菊一郎、小山祐士、大江賢次、在郷組の藤原審爾、高田英之助らとの会合ひんぱん、夕爾も加わる。長女晶子出生。
昭和21年7月　詩集『昔の歌』（ちまた書房刊）『春燈』創刊とともにこれに参加し、久保田万太郎に認められる。
昭和24年3月　詩誌『木靴』創刊、昭和四十年八月第四十六冊まで主宰。六月詩集『晩夏』（浮城書房刊）長男純二出生。

昭和十三年、夕爾は故郷の田舎に帰って、そこで永住を決めている。近代詩の先がけをなした時代、詩人の多くは象徴的に故郷を捨てて行った。室生犀星の「ふるさとは遠きにありて思うもの」は全国津々浦々の文学青年たちにハイマート・ロスの夢をふりまいた。そのときどきの青春が街と、都市とどのように関わりあっていたかをみることは興味深い作業である。夕爾もまたこれらの青年たちの列に加わり、〈僕はいつも新鮮で孤独でありたい／（それを感じるためにこうしてかえってくるのだが）〉[5]とうたった時期をもった。しかし夕爾の場合、そういう束の間の夏は青春の挫折としてやがて終る。時代の動きに逆行して故郷に帰来した夕爾の日常は〈友よ／僕の生活は相も変らずタデ科の植物の実のやうに乏しいが／しかし僕はノンキでないことはない／（それが老人のものであるのをいとわないなら！）〉（「秋のほとり」）とうたわせる。〈新鮮で孤独でありたい！〉と願う夕爾が老人のものである

Hosei University Repository

生活をいとわないわけはない。しかし一方では、生れた家に帰って、〈家は大きい、さうして私のなかでは傾いている〉[6]と感じ、自分の力で支えようとも思うのである。家はただ病弱な詩人を保護する機能よりは、むしろ逆に支えねばならないのだ。〈黄いろい書物が私の手からすべりおちる／よはよはしい憤怒のやうに／風がしきりに夏をめくる／私のために／母親のために／そのほかの人のために（「生れた家」）多くの人は夕爾の優しさをたたえ、温雅な性格をのみ言うが、木下夕爾の〈書く私〉は〈憤怒の私〉ではなかろうかと詩集をくり返し読むうちに感じるようになった。〈憤怒の私〉であるからこそ、詩語の洗練が必要なのであると。私小説の異端的作家・葛西善蔵に通じるものがあるのではないかと。

夕爾が詩の中で「僕」と呼ぶものは、『檸檬』（梶井基次郎）の最初の一行にある「えたいの知れない不吉な塊」のようなものであって、一方でそれを凝視している「私」というものがある。これはわたし個人というよりもっと強いもので、しゃべっているわたしをそのまま文学にしてもこの「私」にはならない。俳句を読む夕爾の「私」が人と人との間にある社会的な「私」を踏まえている（「夕爾は句作において、古格遵守の方向に徹底した、師と選んだ相手は守旧派として知れる久保田万太郎でこの師に全身没入のかたちで帰依した」（朔田恭）[7]とあるが、実生活においては様式を重んじることが夕爾の近代性であったと思われる）としたら、詩を書く時の「私」はもっと憤りに満ち、孤絶した場所にいる「私」だ。文字にする時にはどうしても「私」は客観化、分析、観念化がしぜんに行われてしまう。それに抗して、これをラディカルに表現しようとすると表現が解体する。

遠い眺め

その一

ずつと遠く／目の限り／空と水の中へ／細まつて行つてる／岬の突端の一点／あれが僕です／突端の／そのまた突端の／岩でもない／水でもない／空でもない／在りもしない／消えもしない／あれです／あれです

その二

Hosei University Repository

断崖がある／岬の海と空がひろがつている／真昼の波が／絶壁を洗つている／単調に執念ぶかく／と／大型バスがきて／観光客を吐き出した／げに／君も美しく遠い眺めで／僕はいつもそこまで運ばれる／運ばれて吐き出される／ヘドだ

（『笛を吹くひと』）

しかし、「描いた自分」にあきたらず「ここにいる自分」をつかもうとするには、小説よりも詩のほうが夕爾の場合は成功している。

笛を吹くひとよ

笛を吹くひとよ／あなたが僕の笛を吹くとき／そのとき僕はここから出てゆきます／あなたがうつとりしているとき／僕はもうここにはいない／あなたの指の先から／あなたの唇がしめした歌ぐちから／僕は急いで出てゆきます／この美しい真昼の／花の咲いている方へ／水の流れている方へ／遠くへ／もつと遠くへ／僕は出てゆきます／笛を吹くひとよ／あなたが僕の笛を吹くとき／あなたがザインをゾルレンにかえるとき／そのとき僕はもうここにはいない／笛を吹くひとよ／笛を吹くひとよ

（『笛を吹くひと』）

憤りをもって生きている自分を凝視してもそれが運命を変えることには何の役にもたたない。夕爾の日々の座席はそういったところにある。

日々の座席

僕はネクタイをしめる／できるだけ美しい布きれで／僕の毎日をしめあげるのだ／それから吊皮にぶら下るために／電車に乗る／僕の場所に／いつでも／君が先に坐つているのだ／おお僕を身ぶるいさせる／ひろげられた一

Hosei University Repository

枚の新聞紙の／その厚い壁／永遠のように長いその遮断機　（『笛を吹くひと』）

古井由吉は葛西善蔵の生き方と表現について語っている。[8]「自分を客観するというのは、つきつめれば、客観して認識してそれでどう対処するというものじゃないと思う。ただ運命に対して生きていく気力を鞭打つためにやるんだ」。このことは夕爾にも言える。

詩友、久井茂氏も夕爾の詩「秋のほとり」にふれて、「安住というかたちで、自分が故郷の田舎に埋葬しようとしているものの値打ちは、木下さんがいちばんよく心得ている。木下さんにとって、詩を書くということは自分に対するもっとも誠実な内的契約であった。実生活と折り合いをつけるための妥協や掛け引きを介入させる余地は全くなかった。いちどその手で葬り去った青春を、口を拭って詩にうたうことなど思いもよらなかったろう。「(それが老人のものであるのをいとはないなら!)」というのは、さりげなく見えて、実は木下さんにはめずらしく肉声をひびかせた詩句なのである。」(『追悼記念誌』)

夏目漱石を論じて柄谷行人は「人間と人間が関係づけられて存在するとき、われわれにどうすることもできない虚偽や異和が生じるということ、それは観念や心理の問題などではない。われわれの生存条件の問題なのだ。[9]」とさまざまな方法があるかの如き言説に対して、人間のありようの普遍性を提示している。

夕爾が東京にとどまって詩を書くことを断念したのも、また田舎にあって詩を書くことを断念しえないのも、人一倍虚弱で且つ繊細すぎる感受性を持って生れた人間の存在条件の問題なのである。「わたしは田舎をおそれる、／田舎の人気のない水田の中にふるへて、／ほそながくのびる苗の列をおそれる。／くらい家屋の中に住むまづしい人間のむれをおそれる。／田舎のあぜみちに坐ってゐると、／おほなみのやうな土壌の重みが、／私の心をくらくする、／土壌のくさったにほひが私の皮膚をくろずませる、／冬枯れのさびしい自然が私の生活をくるしくする。／田舎の空気は陰鬱で重くるしい、／田舎の手触りはざらざらして気もちがわるい、／わたしはときどき田舎を思うと、／きめのあらい動物の皮膚のにほひに悩まされる。」(萩原朔太郎『月に吠える』大正六年)しかし、こ

Hosei University Repository

うした田舎を夕爾は恐れながら見つめ、見つめることによって心の棲み家を作った。夕爾が田舎に帰って永住をきめたのが昭和十三年でその二年後朔太郎は没しているので、夕爾がこの詩を読んだとみてもさして大きな間違いはおかさないはずだ。私は前稿で、夕爾にとって見ることは触れることだと書いた。ここではそれに加えて、夕爾にとって触れることは愛することでもあると言いたい。〈田舎の手触りはざらざらして気もちがわるい〉と書くそれらを、夕爾は一つづつ触れ、愛し、詩にした。夕爾のエッセイや私信に朔太郎に敬意をもった表現を再三目にしたが、私は夕爾はその質を言えばよほど室生犀星に近いと考える。「犀星は、人生への愛と苦悩に満ちた純心な求道者として、生きることと書くこととが一致している詩人であるが、作品は高度に美的に昇華されて苦渋のあとをとどめていない。その詩語も独自のもので、従来の伝統詩（短歌、俳句）系の抒情と、漢詩ならびに漢語調の抒情と、口語無韻の抒情といった、それぞれの持ち味の違った要素と混合して、一つの調子の高い新鮮なリズムを作りあげている。（鮎川信夫『詩の見方』）

夕爾が当然目標として気になるはずの犀星を口にせず（犀星のみか夕爾には、どうもそうした傾向がみられる）朔太郎を称揚するのは、この詩人に夕爾の感情を刺戟する何かがあるからではあるまいか。朔太郎について鮎川信夫は次のように手きびしい見方をしている。（要約すると）「残念ながら萩原氏の詩は、ながく読むに耐えないものである。人生に対して漠然たる畏怖の念とともに好奇心もあるさまざまな抑圧に悩む年少の一時期には独特の魅力があり、官能を目覚めさせてくれるが、それらは経験とともに消え去るようなものだ。氏の病的要素とか幻覚性は、表面的な言葉の効果によるもので、特異な趣味であって、普遍的なものでないため幻想から醒めてしまうとかなり無意味になってしまう。」[10]

朔太郎は、離郷し、こんどは夢敗れて帰郷する「夜汽車」の中でさえ、その〈あまたるきにすのにほひ〉に酔う人間である。その上一生母親から生活費を貰っていて、生活の糧を自分で得ようとしなかったのである。こうした人間を夕爾は自分とくらべて、その高踏性にあやかりたいと思ったのかもしれない。〈ボードレールの〝近代の憂愁〟という問題を日本化している〉と評される朔太郎に田舎の崩壊しつつある共同体の中で孤独というものを凝視

Hosei University Repository

するしかなかった夕爾が学びたかったものは、この高踏的に見える態度であった。近代というものが著しく不足していた時代、近代を方法化した朔太郎の才知は称賛に価するが、ボードレールに感じとられた近代の地獄が朔太郎にはない。むしろ地道な日本の近代は、夕爾のような周縁（地方）において、孤独な詩人として生きるところから思索されたのではなかったかと思う。大岡信がロバート・エップ訳『木下夕爾詩集』の英訳序文で、中央から遠く隔った地方都市で生涯、詩を書いた夕爾を強調したのはこのことに帰因する。

さて、夕爾の家出に話をもどそう。家出の時期が昭和十九年一月結婚していて、その年か翌年のことであるとすると、それは、家出というほど大変なことではなく、伴侶を得て薬局をやっと留守にすることができ、その解放感が旅に出る動機であったのではないか。（妻・都氏は看護婦の資格をもたれていたともきく）どこの家族でも新しい家族がふえれば、いざこざはつきものである。東洋に心の家郷を求めたラフカディオ・ヘルンの旧居を訪ねたいと思う夕爾の旅心は、実は詩人がやっと生きるための装置をととのえ、創作活動をはじめようとする前の準備運動でもあった。

この時期の夕爾の周辺は、年譜にあるように中央（東京）よりの疎開祖の文士たちと在郷組の文士たちの交流があって、過ぎ去ってみると夕爾にとって生涯で一番充実した心楽しい一年余であった。井伏鱒二を介して湯藤正美を知ったのもこの時期である。

この湯藤正美という青年は、こうした文士たちの前に存在そのものが、まるで一篇の美しい詩のようにあらわれ、一年あまりで去っていった。夕爾の心にも詩にも影響を与えた青年と思われるので追悼の文章を記しておく。湯藤正美を読者に紹介する意味でさきに井伏鱒二の追悼文をあげよう。

湯藤正美君の「こがらしの遠のくころ」

はじめ私は湯藤君に会ったとき、その慇懃な態度から、もしかしたらこの青年は、学校教員志望の人だらうか

Hosei University Repository

と思つた。その次に会つたときには、その日本の古典に対する執意から、国文学者志望の人かもしれないと思つた。

その次には、この人は詩人になるつもりかもしれないと思つた。さうして湯藤君の死後、私はその遺稿を見るに及び、これは詩人として惜しむべき容易ならぬ才能の人であつたと感じた。

遺稿によると、湯藤君は、すでに死を覚悟してゐたことが知れる。しかも死期が近づくにつれ、一作ごとに才能の豊かな萠芽と発育を見せてゐる。無体な運命の才能といふべきだが、詩を書かうと念じてゐた湯藤君にとつて貴重なものは、その短い生涯に書き残した、わづかな詩篇以外に何ものもない。

今回、木下夕爾、近江卓爾両氏の斡旋により、その遺稿詩集の上梓される運びとなつた。題して「こがらしの遠のくころ」といふ。いづれ機会を得て出版記念の会を催し、故人を偲びたいと思つてゐる。

（昭和二十四年九月二十八日夜）

そして木下夕爾は次のような追悼文を寄せている。

哀惜

僕は今まで正美君のやうな青年に会つたことがない。多分これからもないだらう。惜しいことをした、つくづくとさう思ふ。何故こんなに早く死んぢまつたのか、さう思ふと情ない、腹が立つ。さびしさは日とともに深いやうだ。こんな時正美君と話すことができたら、と思ふことが始終ある。正美君は僕とはひとまはり以上も若いのにさういふ頼もしいところを多分に持つてゐた。

「もう五年も生きてゐたら……」とみんないふ。さう、そしたらどんなにいゝものを書くやうになつたらう。正美君は自分の持つてゐる素晴らしいものを目覚せずに死んだ。すくなくともそれを大切にしようとはしなかつた。

わづか一年あまりの交遊だもの、もつといひたいことが沢山あつた。あまりに早く僕たちは別れたのだ。正美

Hosei University Repository

君もさう思ふだろう。
僕はときおり電車の窓から新市の町を眺める。しまつたことをした！　しまつたことをした！　と心の中でつぶやきながら。いつまでこれをくりかへすことかと思ひながら。

夕爾は湯藤の純粋さの中に自分の少年期を重ねていとおしみ、さらに湯藤の青年でありながら、老成した世界をとらえる目に驚愕したと思える。たしかに湯藤正美の詩には、ことばを越えた祈りがあり、中世の僧のような、深さやしたたかさを感じさせるものがある。祈りの詩をみよう。

月

暗い空に／ひとり仰ぐ／月は白く／ただそれだけである／ただそれだけであるゆえに／祈りてやまず

寒魚

かなしきことをおもひつつ／寒魚は泳げり／かなしきことをおもへども歎かず／歎かず／ただかなしさのひたすらに泳ぎ／泳ぎつつ／こころ遠く／遠きかたへをのぞみ／遠きかたへをたのむなり。

病弱な湯藤は二人の兄をなくし自らも旭川へ入隊、除隊となったあと終始一貫して和漢洋の古典文学を愛読、ことに詩経と論語は発病以来手離さなかったと言われる。何のために？彼は人間が何をなせばいいのかをもっとも根源的なところで凝視していたように思える。〈何かに参加し、なにかをやればよいというわけではない、大事なのは、人間がこの世界で強いられてあるあり方、そこから来る「促し」だけだ〉という言葉を記憶している。彼の祈りの詩の裏にもそういった見えない世界の感受と認識が感じられる。そこには人間の意志のなしうることへの絶望がある。しかし彼の詩はこうした祈りだけではない。詩「夕の途」で湯藤は〈何故に／立ち止つたのか／僕も知ら

Hosei University Repository

なかつた〃しかし／野路に／くろく落ちてゐた／僕の影を見た時／引き返すことにきめた。〉と書く。彼の詩の言葉は今度は激しく外に向う。踊り念仏の開祖一遍上人は大詩人であり、その和讃は和讃文学の傑作だと言われる。(11) 一遍上人は備前の出身であるという縁から同じ吉備の国、備後の湯藤に私は一遍を重ねてしまう。

眉間の疵

塵埃に薄暗い八衢を／うろたへた足どりの奴は多いが／眉間に疵もつ奴はゐないのか／俺は実に探してゐる／俺の殺意を一触にして発せしむるもの／眉間に凄愴なる疵をもつ奴はゐないか。

人ごみ

人ごみの上を／黒ずんだ風が吹いてゐる〃人々の心は／その風に運び去られ／形骸のみが／忙しく動く　忙しく〃西にはさんちまんたるな秋の夕陽――それはうらめしげに〃何がうらめしいのかこの忙しさに／忙しく動け忙しく／私もさつさと人ごみに混つてしまふ。

湯藤正美のことを語りすぎたが、詩作一年あまりの間にこうした詩を書いた湯藤のその氷山の下にある部分の大きさに心奪われるからである。「正美君は自分の持ってゐる素晴しいものを自覚せずに死んだ。すくなくともそれを大切にしようとはしなかった」夕爾のこの思いは、以後夕爾の中に深くひそんで、表面おだやかな日常茶飯事の中でも一ときも忘れることのない生の課題となったと想像される。夕爾の詩に恋の詩がないというのは通説になっているが、夕爾は恋より愛の詩人なのである。夕爾の次の句には湯藤正美の面影が重なってみえないだろうか。

友葬り来し菜殻火の夜を燃ゆる
あたたかにさみしきことをおもひつぐ

Hosei University Repository

ひとの手のつめたき記憶夜の秋
夭折す皿にのこれるパセリ青く
月涼しこころに棲めるひと遠く
夕焼濃し手を振りあふだけの別れ

夕爾の湯藤正美に対する哀惜は、詩集の発行、追悼集の編集と多忙きわまる時期にもかかわらず惜しまず時間をさいていることからも知れる。夕爾と湯藤の孤独の深さやそれへのおののきがそれを可能にしたのだ。「深いところで自分自身と結びつくことによって、実は深いところで他者とも結びついているのだ。つまり自己を統合化しえないならば、他者との根源的な関連性も絶たれざるをえないのであって、〝心やさしさ〟は自己を自己自身と同時に他者とも結びつけるのである。」[12]（柄谷行人）

ところで、この時期夕爾は短篇小説をいくつか書き、東京の井伏鱒二に送っていたことが没後わかった。そのうちの一篇、「日常茶飯事」は十年後編まれた『木下夕爾追悼記念誌』に掲載されている。附記に「これは井伏鱒二先生宛に送られたもので、先生が保管されていたものを、とくにお許しを得て掲載させていただいた。原稿は和紙でつくった封筒に入れ、宛名は毛筆で書いてあり、広島万能倉局昭和二十四年十一月十五日の消印がある」とある。

なぜ彼が小説を書いたのか？　それは、言うまでもなく、夕爾の中に内的危機が生じ、以前の抒情詩という形式に容易におさまらないものが生じたためである。完全な保護者のもとにいて高踏を任じているのでなければ、「田舎の食卓」や「生れた家」のような詩は書けない。しかし、こうした状態での〝私という現象〟はすでに表現しつくしたと夕爾には思われた。

（前略）申しわすれましたが、先月中旬長男出生、純二と命名、思ひぞ屈することばかりふえてまゐります。したがって詩もなかなか出来ないんですが、旧臘の作一篇御笑覧に供します。どうも自分でも悲痛がってゐるような傾きが強くなりました。かねて高踏を以て任じてをったつもりですけれど、近ごろは素材の行きつまりもあっ

Hosei University Repository

て度々女房子や生活状態が引き合ひに出るやうに相成りました。ひとつには年令のせゐかも知れません。阿々。二十四年二月二十日夜（詩友、高田英之助宛書簡『追悼記念誌』）

「年令のせい」という言葉はよく聞きもし私も口にするが、生き耐えた時の弱音の吐露である。夕爾はおそらく創造者に影のようにつきまとう「狂気」を無意味なものと化す地点に無意識に立とうとしていたのであろう。可憐な抒情詩で出発した犀星が『愛の詩集』で善行の完成に向ったことを述べた文章で、富岡多恵子は次のように書いている。

詩は、それ自身で「詩的なもの」を振りはらっていく。これは、言葉を扱う技術の問題としてではない。技術の獲得も、「詩的なもの」を振りはらっていきはするが、詩自身が「詩的なもの」をうとましがるのである。詩は、「詩的なもの」の欺瞞をみぬき、むき出しになっていく。むき出しになったもの、というのは、詩人の私的な真理にすぎない。つまり、それが述べられれば「私的」が客観化を得て一種の経文となる。『愛の詩集』の大半を占める、「詩的なもの」を振りはらった詩篇の退屈を、こういう一種の経文化としても考えられるのではないか。

一度、経文化にいきついた詩は、そこから更に詩を開くことよりも、経文が解説される、或はパラフレイズされる、という虚構の道筋へ乗りかえる。経文は説経という虚構化で一般化される。説経のもつ虚構は、すでに詩よりは小説に近づいているのである。（『室生犀星』）[13]

さて夕爾が犀星のように「詩よきみとお別れする」という文章を書かないまでも詩との別れを決意して小説を書いたかどうかは、今は問わないで、「日常茶飯事」を一読した感想だけを書いておく。この短篇は、「おれ」という一人称で語られる私小説風のもので、会社か役所に勤めながら詩や俳句を書いている男がなにかにつけ妻の言う

Hosei University Repository

ことなすことが気に障ると言った云わば文人風インテリを自認する男のぼやきが主たる内容だ。〈結婚八年後の今日まで、おまへに一枚も着物も買ってやらなかったが、事情やむを得ないものがあったのだから仕方がない。その間、おれも何一つ新調したおぼえがないから御同様だ。おれだって新調の背広とまではゆかなくても、常に真新しいワイシャツに流行のネクタイをしめて、朝夕の電車に乗ってみたいといふ願望は持っている。今さら車内の若い女性の注目を浴びてもしやうがないが、少くもそれを期待し得る可能性があるわけだ」と言った調子で、自分に対する妻の理解のなさをやみくもに責めていて滑稽味もけっこうでている。そしてこのおれは、近所の子供が捕えた蝮を百円で譲り受け瓶に入れて朝夕眺めて思う。どんな動物でも一箇所くらいは可愛らしいところがあるものだが蝮に限っては微塵もない。瓶の中で、三角にひしゃげた頭をもたげ、全身これ憎悪にみちみちてゐるやうすは、いかにも痛烈そのもので、かういふ気持になれば世渡りにも大した面白味が出てくるだらうと。またこのおれは妻がこの蝮を売って二人の子供に勝手に玩具を買ってやったのさえ気に入らず、「徹頭徹尾、おれは被害者の立場に在るもののやうだ。一方的見解に不足かもしれないが、夜ふけて役にも立たぬ詩を書いている時、いつもその感を深くする」とまるで夕爾のなまな気持ちの述懐があらわれている。

この小説は文体にもどこか太宰治の「如是我聞」を思わせるものがあり、孤絶に耐えられない夕爾が垣間見える。夕爾は太宰治と同じように女性の母性愛の部分にのみはたらきかけ接する少年の心を残したままの大人であった面がある。この時期の夕爾はまだ、「生れた家」の頃の〈弱々しき憤怒〉しかもてなかったようだ。

昭和二十四年といえば、詩誌『木靴』が創刊された年で、それにともなって夕爾の社会活動も活発になった時期である。この小説を読むと夕爾は戦後の地方マスコミや市町村の文化活動を、大衆に対する啓蒙活動だとは思っていなかったことが知れる。詩を書きたがっている人の心の扉を開き、自分の書く詩も理解してもらうことだけしか夕爾は考えていなかった。習作「日常茶飯事」のぼやきは、そのことに帰因する。こうした詩人を夫に持てば、妻は好むと好まざるとにかかわらず家計を支え、子供を守って時代の流れと共に流れるしかない。純な心を大切だと思ってもそれを持ちつづけて、良いひとになってばかりはおれないのだ。夕爾とて同じであったろう。社会的存在

Hosei University Repository

としてのわれわれはその中にいる限り、その影響をまぬがれるわけにいかない。そこにある価値を批判しながらも批判の中に時代の流れがしのび込んで来る。それを吹っ飛すのが詩であって、日常に素材をとっても、夕爾の詩はその点では、びんと一本はりつめた糸がひかれている詩が多い。詩を書く時の夕爾の直観が、あるいは詩を書く時の夕爾の正直さがそれを可能にする。しかしこの小説には、それがみられない。鮎川信夫は正直について言っている。

「自己」をいつわっては、もはや詩人が世界と対峙することは不可能となり、世界もまた彼の前に真の姿を現わさなくなる。自己をいつわらないという「正直」だけが、全世界と対峙しうる詩人の唯一の武器なのである。だが、この意味での「正直」は、どんな詩人にとっても難事にちがいない。すくなくとも自分はいつも正直だとおもっているようなおめでたい詩人の正直とは、何の関係もないことはたしかである。それはいかに「正直」を志しても、人間はどこかで不正直に陥ち込むほかはないという、苦しい認識に立って辛じて口にすることができるといったVirtueなのである。」(『歴史におけるイロニー』

この時期の夕爾の詩に「私は」という短い詩がある。

私は
石炭のように黙っていたい
石炭のように激しく燃焼したい

この章完。

注

(1)『栗田勇著作十集』　講談社

Hosei University Repository

(2)『宮澤賢治』　岩波書店
(3)『梶井基次郎全集』全一巻　ちくま文庫
(4)『定本木下夕爾詩集』に収録、そのなかに「原爆ドーム」「花のまぼろし」がある
(5)「ふるさと」『定本木下夕爾詩集』牧羊社
(6)「生れた家」『定本木下夕爾詩集』牧羊社
(7)『菜の花いろの風景』　牧羊社
(8)『私という白道』　トレヴィル
(9)『畏怖する人間』　冬樹社
(10)『東京詩集1』　鮎川信夫　作品社
(11)『海とせせらぎ』(大岡信対談集)　岩波書店
(12)『畏怖する人間』　冬樹社
(13)『室生犀星』近代日本詩人選＝　筑摩書房

資料、湯藤正美詩集「こがらしの遠のくころ」は、木下夕爾、近江卓爾、村上菊一郎など湯藤を知る人はすでになく、その上、この詩集は出版されたものでないため入手困難と思われるので資料として掲載しておく。

湯藤正美詩集『こがらしの遠のくころ』

月

暗い空に／ひとり仰ぐ／月は白く／ただそれだけである／ただそれだけであるゆえに／祈りてやまず。

むねぬちに

Hosei University Repository

むねぬちに／わがこひをひそめつつ／秋もはや　そのあゆみ　つねとはなりし／わが恋も　わがこひも　つねなるごとし。

こころひそかに

この苦しさを／しづかに目瞑ぢ／心ひそかに待つものあれば／――心ひそかにまつものあれば／哀しくも微笑まゆ。

わが庭に

わが庭に夏の夕迫るころ／あを葉しづかにくろずみ／そのかなたに空は／憩ひの時を知らす／ああさなり憩ひの時を。

いのり

さむしさが／われを誘ひ／われはゆく／いづちとわかねど／／わかねども／ゆくわれの／頬つたふなみだ。

叫びたくなつたぞ

俺は／叫びたくなつたぞ／／神からもらつた／俺の立派な心が／他を圧して／／むくむくと／たくましく／伸びてゐる／伸びてゐる／／伸びろ／さうとも／果しなく伸びろ／／ああ俺は／叫びたくなつたぞ。

人ごみ

人ごみの上を／黒ずんだ風が吹いてゐる／／人々の心は／その風に運び去られ／形骸のみが／忙しく動く　忙しく／／西にはさんちまんたるな秋の夕陽／――それはうらめしげに／／何がうらめしいのかこの忙しさに／忙

Hosei University Repository

しく動け　忙しく／私もさつさと人ごみに混つてしまふ。

月かげ青き夜を

月かげ青き夜を／われらしづかに眠りてあらん／しづかに眠れば／なみだかそかに頬をたれ／ああ　今ははや／そのなみだも凍るべく……

死にゆく兄

兄は／安息所を求めていささか迷うてゐたが／あまりにも手近に発見したので／おどろきを／苦笑にあらはしつつ／急に足を早めて／行つてしまつた。

こがらしの遠のくころ

こがらしの遠のくころ／すべての草木は凍影となる／／こがらしの遠のくころ／路は死人の皮膚のごとくしろい／／こがらしの遠のくころ／棕梠はしづかにこころをかなしみにゆだねる／／わが形骸は祈り／／ああ　こがらしの遠のくころ／わたくしのなみだは／しばしばはるかな空想のくにで流れてゐた。

眉間の疵

塵埃に薄暗い八衢を／うろたへた足どりの奴は多いが／眉間に疵もつ奴はゐないのか／俺は実に探してゐる／俺の殺意を一触にして発せしむるもの／眉間に凄愴なる疵もつ奴はゐないのか。

寒魚

かなしきことをおもひつつ／寒魚は泳げり／かなしきことをおもへども歎かず／／歎かず／ただかなしさのひ

Hosei University Repository

たすらに泳ぎ／／泳ぎつつ／こころ遠く／遠きかたへをのぞみ／遠きかたへをたのむなり。

あきらめ

抱きしめたいと／差伸ばす手が／ふともおびえ／おびえては／つひにそのまま／別れてしまつた　今日も／ああ　ただ孤りになつては／また故わかぬ涙を流す／故わかぬ／故わかぬままに／あきらめてしまふのだ。

卵

親鶏は不思議なるものを見凝む／藁の巣の卵——／そのはだえのかたきに／朽ちたる竹格子の影は宿り／／ああ　つめたきもののしのびより／くらきもののしのびより／卵は遠き雪空をのぞみつつ／宇宙のそこひにこころ沈み……

いのち

さむしさに／ゆだねける／風にちるやなぎより／かそけきいのち／／かそけきいのち／風に舞ひ舞ふ／そのはては知らねども。

残酷な風がくる前に

ひがしの風が吹く／かぜとともにわたくしのいのちも飛び去る／とりのこされたわたくしは／さびしいけれどしづかだ／すべてのわたくしのいのちよ／このうつくしい風とともに飛び去れ／残酷な風がやつてくる前に。

ひよろ長い柿の木のてつぺんに

ひよろ長い柿の木のてつぺんに／たつた一つ実が／熟れきることができないでよはつてゐる／／おお　それは

Hosei University Repository

／熟れきらないうちに／落ちさうだ／落ちさうだ。

夕の途

何故に／立ち止つたのか／僕も知らなかつた／／しかし／野路に／くろく落ちてゐた／僕の影を見た時／引き返すことにきめた。

煙草

熱に慣れ／病に落着き／ひさかたに吸ふ煙草／／目をみはり／見きわめんとす／むらさきの煙の行衛。

永久に

永久に安らふべきところはないものだらうかなあ。ぼんやり、縊るに都合のよささうな枝を眺めてゐた。

美しさを求めて

美しさを求めて。／美しさに衷心よりおどろく心を求めて。

子どもたちが去つた公園に

子どもたちが去つた公園に／ぶらんこがひとりで揺れてゐた／ぶらんこの影がゆれてゐた／風の中のコスモスのやうに／さびしい俺のこころも揺れてゐた。

ボクガ

ボクガ／固ク握ツテキルモノヲ／投ゲルゾ！／何カボクモ知ラナイモノヲ。

Hosei University Repository

初秋の朝は

初秋の朝は目をとぢ／いまはるかなる方に／世にも美しき蠟色の皮膚が／時につれて冷え／おのづから冷え／／ああ　しづかに途絶えんとする脈拍に／こよなく　ふさはしい時の刻み……

おれはお前が好きだ

おれは／お前が好きだ／ここへ来い／ここへ来い／寂しさよ。

けふこのごろ

けふこのごろ／目ざめると／まづ空模様が気にかかる／晴れてゐるとよかつたよかつたと思ふ／曇つてゐるとがつかりする。

解題

近江卓爾
木下夕爾

湯藤正美。大正十五年七月二十日、広島県芦品郡新市町に生ル。
幸治郎氏の末子。
昭和十三年四月、福山工業学校入学。
同　十五年四月、戸手実業学校へ転ズ。

Hosei University Repository

私たちがはじめて正美君と相知つたのは昭和二十年盛夏であつてそれ以前のことははつきりとは判らない。文学の血は恐らく母堂から受け継がれたものであらう。文学に熱意を抱くやうになつた正美君は、理科系統の学校にゐたたまれなくなつたらしく、といつて実業学校へ転じたのは理屈に合はないが、万やむを得ぬ事情があつたのだと推察される。

昭和十八年四月、大東文化学院へ進ム。
同　二十年七月、旭川へ入隊。同十月除隊。

正美君もまた、同時代の青年と同じ道を辿つたわけであるが、期間の短かかつたせいもあらうけれど兵隊時代の話はほとんどしなかつた。母堂のお話によればこの頃が最も健康にすぐれてゐたもののやうである。けだし文学的には勿論空白であつたらう。

昭和二十年十月、次兄幸夫氏、硫黄島ニ戦死。
昭和二十年十月、ハジメテ井伏鱒二先生ヲ知リ、爾後親近セリ 。

敗れ果てむいくさのきはみ見凝めつつ斃れし兄を思はざらめや

と、正美君は遺稿に、悲痛の情をのべてゐる。

井伏先生は当時、深安郡加茂村の御生家に疎開中であられ、最初旅客として旅館を営んでいる正美君の家に来られたわけであつたが、これが同君にとつて一大機縁となつたことは疑ひを容れない。短歌を学んでゐた正美君は、この頃からやうやく詩に熱意を示すやうになつたものと思はれる。

Hosei University Repository

思ふことなきままに我が起きてあれば嵐はつひに遠のくごとし
嵐つひに遠のきはてて何がなしねむたくなりぬ眠るべかりけれ

遺稿に見出されるこれらの歌は、一応完成されたスタイルを持ってゐるが、それ以上に、同君独自の風懐の一端をうかがふに足るものである。

昭和二十一年六月、学業継続中発病、帰郷。
同　二十一年十月、長兄公長氏病死。

発病、学業の中断、長兄の死、正美君にとつては悪い年であつた。ことに次兄の戦死につぐ長兄の病死は一大痛撃であつたらしく、日記及び遺稿の随所にそれがうかがはれる。さうしてこの後同君は何度も自殺を企てたのであつたが、多量の催眠剤は、一層その胸部疾患の悪化を早めた観がある。

ひたぶるに生きむこころを決めるさへ涙あふれてとめどもあらず
いまはただ夜の更けゆくをねがふべしつひには朝も来らむものを

けれどもこの後の約一年間は、最も多く井伏先生に親しみ、先生と一しょに小旅行を試みることも出来たほどで、詩も多く作り（収録の詩はほぼこの間の所産である）友との交游も厚く、一面からいへば楽しい時期ではなかつたかとも想像される。

この間、学業に対する執着のやみがたいものがあり、二十二年四月母堂と共に再度上京したが、学業の継続は

Hosei University Repository

どうしても健康が許さなかつた。爾後、文学ことに詩に対する傾到は益々深く且つ激しくなつたもののやうである。この頃の日記によると体温の多きは三十九度に近く、少なきも七度を下らない状態であつて、正美君はしばしばその痛苦を訴へてゐるが、人に知られることを肯んぜず、私たち交友の誰もが、それほどであらうとは思ひつかなかつた。

昭和二十二年九月、病臥。学業モ断念ス。

この時はもはや如何ともしがたいものがあつて、正美君自身も、それをはつきり自覚してゐたらしい。ただ病苦の中でも好きな読書だけはやめず、しづかに死のいたるのを待つもののごとくであつた。

正美君は、終始一貫して和漢洋の古典文学を愛読してゐるが、ことに詩経と論語は発病以来一日も手放さず、日記の各所にその引用句が見られ、さらに英語（主として The Vse of life）の毎日の復習は、いかに学業に気がかりであつたかが察せられる。多くの空白を残したままに終つた文学への悲願いたつては、私たちはいふべき言葉を知らない。

正美君に意中のひとのあつたらしいことは、日記や遺稿からも察せられるが、どんなひとであつたのか、私たちはむろんのこと、同君の家の人々にもわからないままに終つた。

私たちは、正美君の最も傾到した詩を以て本書を編み、遺された三十数篇の中からこの二十七篇をゑらんだ。判明した限りに於て制作日時に従ひ、題名のないものは、その書き出しを取つてこれにあて、「こがらしの遠のくころ」といふタイトルは、正美君のさびしい性格と生涯を暗示するかの感があるので、取つて以て本書の表題とした。

私（木下）が正美君の詩をはじめて見たのは、「人ごみ」と「こがらしの遠のくころ」であつたと記憶する。正美君の詩は前出の短歌にくらべると未完成で瑕瑾も多いやうであるが、しかもなほ凜然たる素質の光の覆ふべ

Hosei University Repository

くもないものがあると思ふ。

正美君は、終始かはらぬ母堂の慈愛の手に抱かれて亡くなつた。これより先二十二年七月すでに上京されていた井伏先生が九州旅行の帰途その死の床に見舞はれたことと共に、同君も瞑するに足るものがあつたらう。

昭和二十二年十二月五日午前十時、永眠。享年二十二。

光暫院釈文典居士。